

巻 頭 言

新型インフルエンザ

愛知県小児科医会副会長
久野 邦義

メキシコに端を発した新型インフルエンザはたちまち世界各地に拡大し、認知後わずか2ヶ月余でWHOがパンデミックと宣言するに至った。日本も鳥インフルエンザに準じた対応を図ったが、侵入は所詮時間の問題であった。5月には国内で最初の感染者が確認され、その後も夏場にはいったん終息するのでは、という大方の予測に反してくすぶりつづけ、秋以降には大流行が危惧されている。その間多くの専門家のコメントがマスコミを賑わし、厚労省やスタンダードプレーの目立つ担当大臣があれこれ過剰気味の反応を示したり、方針に時にぶれがあったり、保健所をはじめとする末端でも対応に苦慮する事態もあり、医療現場でも若干の混乱がみられた。しかし今までのところは幸い大流行には至らず本番はこれからである。危機管理という点から見ると、高病原性鳥インフルエンザが発生したり、今回の新型が跋扈した場合の予行演習になったという見方もあるが、これまでの対応は何とか合格点の60点というところか。

新型インフルエンザに関しては色々情報が入るもののいくつかはまだはっきりしない点がある。まず弱毒か否かについても先日、日本感染症学会の緊急提言(9月16日)でも“弱毒”という言い方自体にも問題があるとしており積極的な対応をすすめている。一方で流行の第1波がピークをこえたとされる南半球では感染者数に比して死亡者は少数にとどまっていると報道された。最近N Engl J Medにのった、発端となったメキシコでの疫学的、臨床的研究にも共通しているのは、患者が20代を中心とした若年層に多く60代以上に少なく、その点で従来のいわゆる季節型に比して死亡者が少ない結果がでていのではないかと推論されている。ただし若年者で重症者がでていよう、わたしが関係している病院でも感染早期から発症する重症肺炎が3人続いて、なにかいままでの季節型と違う印象を受けてい

る。次に感染力についても上記のごとく接触が濃厚な若年層では免疫状態もあつてか感染が急速に拡大しているが、今のところ高齢者では感染者は比較的少なく、免疫状態によるのか、接触度合いによるのか、ウイルス自体の特性かはっきりしない。最後に予防、治療の問題だが、国産新型用ワクチンは秋には間に合うか微妙で、輸入ワクチンの使用や従来の季節型ワクチンとの絡みも悩ましい。またWHOは抗インフルエンザ剤の投与は特定対象に限るべきとしているが、前述の感染症学会の提言では限定せず、積極的に使用すべきと提言している。

これからの流行期、臨床の第1線にあつて、押し寄せる情報をこれまでの経験と知識で的確に取捨選択し、限られた資源の中で、感染源となる小児に適切に対応することによって社会全体の流行蔓延を制御し、患児の重症化を防ぐよう努め、一方で大量発生時の役割分担とネットワークづくりが、われわれ小児科医の目指すところであろう。